

## 学長式辞

新入生の皆さん、ご入学誠にありがとうございます。教職員一同、皆さんのご入学を心より歓迎いたします。また、これまで慈しみ育ててこられたご家族の皆様、本日は誠にありがとうございます。そして、ご多忙の折、ご臨席賜りました銚子市長 越川信一様をはじめとすご来賓の皆様に、厚く御礼申し上げます。

本学は2004年の開学以来、22年間にわたり学校法人加計学園のもとで歩んでまいりました。そして本年4月1日、本学は大きな転換点を迎えました。運営法人が学校法人大城学園へと引き継がれ、今まさに、新たな歴史の一步を踏み出したのです。

大城学園が掲げる使命は「未来を切り拓くグローバル人材の育成」です。これに、本学が守り続けてきた理念「人を助けたい、という人の大学」が組み合わせることにより、皆さんの専門性は、国境や文化の壁を越え、世界中の困難に立ち向かうための「真の力」へと進化を遂げます。

さて、皆さんが生きる現代は、物語（ストーリー）に溢れた時代です。スマートフォンを開けば、SNSには誰かのきらびやかな日常が流れ、動画配信サービスでは洗練された「他人の物語」をいくらでも消費することができます。それらは時に娯楽として、時には励みとして、私たちの生活を彩ってくれるでしょう。

しかし、新入生の皆さんに、今日ここで一つだけ、約束してほしいことがあります。画面の向こう側の『他人の物語』をただ眺めるだけで、貴重な学生時代を終わらせないでください。

大学生活の4年間、あるいは6年間は、皆さんが「自分自身を主人公とするストーリー」を書き上げるための時間です。大学での学びは、あらかじめ用意された「正解」ばかりではありません。研究や実習、あるいは地域社会との関わりの中で直面する葛藤や困難こそが、皆さんが自らの意志で解決し、未来を切り拓いていくための「物語の重要な一節」となるのです。

皆さんがこれから手にする専門知識や技術は、決して自分自身を飾るための財産ではありません。それはいつか、誰かの困難を救い、社会の課題を解決するための「強力な武器」となります。皆さんがこのキャンパスで、他者の痛みに寄り添う感性を磨き、周囲と手を取り合いながら、自分だけの「答えのない物語」を紡いでいくことを切に願っています。

皆さんはこれから、「人を助ける」「人と助け合う」という物語（ストーリー）を綴っていきます。その真髓を体現した、二人の先人を紹介します。

一人目は、銚子のヤマサ醤油第七代当主でもあった濱口梧陵です。幕末、安政南海地震が故郷を襲った際、彼は「何が正解か分からない」という極限の状況下で、自らの大切な「稲むら」に火を放ちました。

暗闇の中で津波の危険を知らせ、村人の命を救う。それは決して、誰かに教わったり、マニュアルに従ったりしたものではなく、「人を助けたい」という一心で自ら導き出した、彼自身の「たった一つの答え」でした。

その後も私財を投じて堤防を築き、地域の未来を守り抜いた彼の行動は、まさに自ら動く「自助」と、共に助け合う「共助」の精神の体現です。皆さんも、学びを通じて自らを高めると同時に、答えのない問いに対しても勇気を持って一步を踏み出し、周囲と力を合わせ、より良い社会を築く存在になってくれることを期待しています。

もう一人は、江戸無血開城を成し遂げ、幕末の国難を救った山岡鉄舟です。彼は「晴れてよし 曇りてもよし 富士の山 もとの姿は 変わらざりけり」という句を遺しました。

富士山の姿は、晴れの日も、厚い雲に隠れる日も、何ら変わることはありません。皆さんの人生も同じです。本日のような「晴れの日」ばかりではなく、大学生活には思い通りにいかない「曇りの日」や「嵐の日」もあるでしょう。

しかし、どんな状況でも、皆さんの「人を助けたい」という志、その「もとの姿」さえ変わらなければ、道に迷うことはありません。むしろ、困難や挫折を乗り越えて「未来を切り拓く」経験こそが、皆さんの物語をより強靱で、深みのあるものへと変えていきます。

このキャンパスから、屏風ヶ浦の先に気高くそびえる富士を望めるときがあります。目標を達成し喜びに沸くときも、困難に直面したときも、どうかこの学び舎から見える富士山を仰ぎ、鉄舟の句を思い出してください。

最後に、大城学園としての千葉科学大学の新たな幕開けとともに、皆さんの学生生活が、希望に満ちた、世界にたった一つの素晴らしい物語（ストーリー）となることを切に期待し、私の式辞といたします。

令和八年四月三日

千葉科学大学 学長 藤本一雄